

## アコーディオンによせて

浜村 淳

むかし、オイチニの薬屋という商売があった。  
手風琴を鳴らして、薬を売りあるくのだが、その  
ときの文句は、つぎのようなものであったらしい。

オイチニの薬を買いなさい

オイチニの薬は良薬ぢや

これで じっきになおるぞネ

忘れず かならず のみなされ

オイチニ、オイチニ

オイチニというのは、1.2にオをつけたもので  
ある。

遠い村の道から、この歌が聞こえてくると、子  
供たちは家からとび出し、薬屋のあとをつけて、  
手風琴の音に合わせて、うたい歩いたものといわ  
れている。

明治から大正にかけての、1枚の風俗画をみる  
ようながめであったろう。

手風琴、なんというなつかしい言葉ではないか。  
これこそ、アコーディオンを、うんと簡単にし  
た、オモチャのような楽器なのだ。

ぶかぶかと鳴る哀愁のメロディは、いつまでも  
子供たちの耳に残っただろう。おとなになっても  
残りつづけたらう。それは、忘れ得ぬふるさと

の思い出として、聞こえつづけたにちがいない。

音楽とは、そういうものである。

手風琴が、アコーディオンになって、さまざま  
な、美しい複雑な音色を奏でるようになっても、  
心に残るメロディは、なかなか聞こえない。

悲しいとき、なくさめてくれ、苦しいとき、は  
げましてくれ、たのしいときは、うたってくれる。  
そんなメロディを、アコーディオンで、かなでて  
ほしい。

いま、オイチニの薬売りはもう来ない。手風琴  
も、めったにみられなくなった。

しかし、心に残るメロディを求める気持ちは、  
荒唐の時代にこそ、つよい。

心にのこるアコーディオンを、いつまでも聞か  
せてほしい。

